

沙石集における希望表現について

柴田 昭二
連 仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに
- 一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、沙石集を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を解明しようとするものである。

『日本古典文学大事典』^③などによると、沙石集は鎌倉中期の仏教説話集。無住道暁著、十卷。弘安六年（一二八三）成立。その成立事情については諸説あるが、原識語によると、弘安二年（一二七九）夏に起稿され、数年間の中絶の後に弘安六年に再び書き継がれて、同年の仲秋に脱稿、その後も絶えず加筆される。その内容は、靈験談、高僧伝、文芸譚、笑話、庶民の生活など約一五〇話の説話を含む。その文体の基本は漢字片仮名交じり文であり、和歌と漢文体のものも含まれる。

沙石集における希望表現について

テキストには、渡邊綱也校注『沙石集』（岩波書店日本古典文学大系85 昭和四一年五月第一刷発行）を用いる。その底本は、巻第一より巻第一〇本まではお茶の水図書館蔵梵舜本（慶長二年書写、成篁堂旧蔵）、巻第一〇末は市立米沢図書館蔵本（興讓館旧蔵本、古鈔一二帖本）を底本としている。翻刻に際して、底本にある振り仮名は片仮名のまま、校注者のつけたものは平仮名で示され、仮名に漢字をあてた場合はもとの仮名を「」で傍記した。歴史的仮名遣いと異なる仮名は正しい仮名を「」で傍記した。

二、希望表現の構成形式

沙石集（以下、「本書」と略す）における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれの用例数は以下の通りである。

〔欲〕	(五四例)
〔トントオモフ〕	(七三例)
〔トントス〕	(六七例)
〔願〕	(五六例)

「願フ」	(三九例)
「欣フ」	(二例)
「給ヘ」	(一四例)
「望」	(五四例)
「祈」	(五〇例)
「乞」	(三〇例)
「請」	(五三例)
「求」	(三〇例)
「誂」	(二例)
「ホシ」	(二〇例)
「マホシ」	(二例)
「タシ」	(一五例)
「バヤ」	(一八例)
「モガナ」	(二例)
「ナン」	(二例)

まず、全体的に、本書における希望表現の用例は豊富である。その構成形式の種類も多様にわたり、主要な構成形式の数も多量にのぼる。具体的に見れば、仏教用語としての名詞「欲」「願」が多数見られる。慣用形式「ソントオモフ」「ソントス」も多く見られるが、「ネガハクハ」は見当たらない。動詞形式も多く見られる。和文形式の形容詞「ホシ」、助動詞「マホシ」「タシ」、終助詞「バヤ」「モガナ」「ナン」が見られ、助動詞「マホシ」より「タシ」の方が多用されている。

また、その分布を見れば、名詞形式、動詞形式などは偏って用いられる傾向が認められないが、終助詞「バヤ」は巻一、巻二、巻三に見られず、巻四に一例のみ見られ、それ以外の一七例は全部巻五以後に集中する。この「バヤ」が後半に偏ることは内容と関わり注目に値する。

三、各形式の用法

1、「欲」「ソントオモフ」「ソントス」の用法

まず、「欲」の用法を見る。本書に「欲」は五四例見られ、そのうち名詞用法が五二例、動詞用法が二例である。

- (1) 上代ハ人心スナヲニ欲ナクシテ、善根ヲ營ミシモ、皆實トシキ心ニ住シキ。(巻第八 三六二頁)
- (2) 五欲ノタノシミ、名利ノ執フカクシテ、マメヤカニ世間ヲ厭ヒウトム心ナシ。(巻第一〇本 三九九頁)
- (3) 是ニ似テ、彌勒ハ賢人ノ如ク穢土ヲ捨、彌陀ハ聖人ノ如ク欲界ニイマス。(巻第二 一一九頁)
- (4) サレバ貪欲・瞋恚等ノ心ノ常ニヲコラム人ハ、生ヲ經トモ止難シト知テ、恐レトヲザカリ、對治ノ觀念、滅罪ノ方法ヲ營ベシ。(巻第八 三三七頁)

例(1)における「欲」は人間一般の普通の「欲」の意を表すが、例(2)における「五欲」、例(3)における「欲界」、例(4)における「貪欲」は仏教用語である。いずれも名詞用法である。

- (5) 高野大師云、「余五八歳、長夜ニ念ニ圓融ヲ、浮雲何ノ處起、本是淨虚空、欲知一心ノ趣、三曜朗ナリ」。(巻第五末 二五七頁)

(6) 利生方便、七十九年、欲知端的、佛祖不傳。

(卷第一〇末 四五九頁)

例(5)(6)における「欲」は漢文における用法であり、「心の一趣を知りたいならば」「真実を知りたいならば」と解され、いずれも希望表現の低位分類では「願望」⁽⁴⁾を「説明」⁽⁵⁾する用法である。

次に、「ソントス」の用法を見る。本書に「ソントス」は六七例見られる。周知のように、「ソントス」はある状況が発生しようとする「将然」を表すが、以下の例のような「有情物」の「将然」は希望表現と関連性もある。

(7) 心ヲ静メテ定ヲ修セムトスレバ、林ニ鳥集テ喧シカリケリ。

(卷第八 三二六四頁)

(8) 「汝ガ自害セムトスル事愚ナリ。昔シ國王トシテ民ヲ惱シタリシ報ナリ。タトヒ生ヲカウトモ、苦ハ通ルベカラズ。」

(卷第八 三二六六頁)

例(7)(8)は、「心静かに禅定を修行しようとする」と、「あなたが自害しようとするのは愚かである。」の意と解され、将然の意をもちいずれも希望表現と関連性があるものである。

次に、「ソントオモフ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「ソントオモフ」は七三例見られる。

(9) 佛乘ノ妙ナル道ニ入シメ、世間淺近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。

(序 五七頁)

沙石集における希望表現について

(10) 「彼詞ワスレガタキ故ニ、兄ヲ助ムト思フ。」 (卷第三 一五七頁)

例(9)(10)は文末で言い切りの形である。例(9)は「真実の深い理を広めたいと思う。」「兄を助けたいと思う。」の意と解され、いずれも省略された一人称の「願望」を「表出」⁽⁶⁾する用法である。

(11) 是ハ人ノ心ヲ直ナラシメント思食ス故也。

(卷第一 六〇頁)

(12) サレバ、佛性ヲアラワサント思ハ人、慈悲ヲ心ニ習ヒ好ベキナリ。

(卷第五本 二〇八頁)

例(11)(12)は連体修飾語の形である。「人の心を素直なものにした」とお思いになるからである。「仏の性を表したいと思う人は」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(13) 自在ノ妙樂ヲエムト思ハ、行住坐臥妄念ヲユルサズシテ、本心ヲ明ムベシ。

(卷第三 一六四頁)

(14) 「セメテハ名字斗ヲモ唱ヘムト思ヘドモ、ウルワシクモイワレズ。」

(卷第七 三一五頁)

例(13)(14)は従属節の形で、「自在の妙法を得たいと思うならば」「せめて陀羅尼の名字だけでも唱えたいと思うけれども、」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

2、「願」「願フ」の用法

まず、名詞「願」の用法を見る。本書に「願」は五六例見られ、すべて

佛教用語である。

(15) 本師阿彌陀ノ本願ヲ頼ミ、實ノ心アリテ念佛ヲモ申サバ、イカニイ
トヲシクモ覺、貴カラン。
(卷第一 八四頁)

(16) サレバ調達ガ六萬藏ノ經ヲ誦セシモ、奈落ヲマヌカレズ、慈童ガ一
念ノ悲願ヲ「オ」コシ都率ニ生キ。
(卷第一〇末 四五七頁)

例(15)(16)における「本願」「悲願」はいずれも佛教用語であり、名
詞用法である。それ以外に、「所願」「大願」「願望」「宿願」「誓願」「行願」
「心願」「願力」「結願」「願文」が見られ、その用法は例(15)(16)と類
似するものである。

次に、「願フ」の用法を見る。本書に「願フ」は三九例見られ、そのう
ち連用形名詞法が四例、実動詞用法が三五例である。

(17) 願ヒノ如ク、スコシモタガハズ念佛シテ息絶ニケリ。
(卷第一〇本 四二七頁)

(18) 其レ世ノ物語、多ハヨシナキ人ノ上、ハカナキ物ネガヒ、口ノトガ
多く、意ノ望ミフカシ。
(卷第一〇末 四六〇頁)

例(17)(18)は、「願いのとおり」、「とりとめのない願ひ」、「の意であり、
名詞用法である。佛教用語として神仏にかける「願」と比べ、この「願ヒ」
はより広い意味の、一般的な「願望」である。

(19) 此世ノゾメキステガタクシテ、榮華ヲ思ヒ、富貴ヲ願フ。
(卷第五本 二二二頁)

(20) コレヲ縁トシテ娑婆ヲ厭ヒ、淨土ヲ願ヒテ極樂ニ生ゼシガ如ク、
(卷第七 三三〇頁)

例(19)(20)は、「富貴になることを願う」「淨土に生まれることを願っ
て」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

(21) 只我心ヲ恥シメテ、今ヨリ後、咎ナク罪ナキ身トナリテ、淨土菩提
ヲコヒ願フベシ
(卷第一 七五頁)

(22) 但自然と戒力ナクシテ、凡下ノ者乞願心ノナキニコソ。
(卷第二 一一〇頁)

例(21)(22)は、「コヒ願フ」の形である。例(22)は他本により「コヒ
ネガフ心」とすべきであろう。「淨土菩提を乞願うべきである。」「乞
願う心を持たない」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

次に、「欣」の用法を見る。本書に「欣」は二例見られ、実動詞用法で
ある。

(23) サレバ、實穢土ヲイトヒ、マメヤカニ淨土ヲ欣。
(卷第一〇本 四〇一頁)

(24) 凡夫ノ智慧ナクシテ、生死ノ獸ベキヲモ不レ知、菩提ノ欣フベキヲ
モ不レ知、徒ニ流轉スルガ如シ。
(卷第一〇末 四四七頁)

例(23)(24)は、漢字「欣」という表記で「淨土を願う。」「菩提を願う
べきことも」の意と解され、「願フ」と同様であり、実動詞用法である。

次に、「給へ」の用法を見る。本書に「給へ」の用例が多数見られるが、

希望表現と認める「給へ」は一四例見られる。

(25)「我ワレニ有縁うゑんノ御舍利おのヲハシマサバ、其相そのさうヲ示シ給へ」トテ、掌たなごころヲ合あはせテ祈念きねんシケリ。
(巻第二 九一頁)

(26)「南無なんぜん三世さんぜノ諸佛しよぶつ、此ノ心ヲ照給へ」ト云ケル音へ、切利たうりてん天へ聞エケレバ、
(巻第九 三九五頁)

例(25)(26)は、「どうかその様子をお示してほしい。」「三世の仏さまたちよ、この心をお見せください。」の意と解され、いずれも神仏に對する祈りであり、「希求」を「表出」する用法である。

3、「望」「祈」「乞」「請」「求」「詭」の用法

まず、「望」の用法を見る。本書に「望」は五四例あり、そのうち連用形名詞法が六例、実動詞用法が二五例、助動詞用法が一例見られ、熟語形式の「希望」が七例、「所望」が一例見られる。

(27)「勝縁しやうゑんノ力ヲ放レテハ、出離しゆぢノ望解のぞガタシ。」
(巻第一 六三頁)

(28)「世ニシタガヘバ望もちミアルニ似タリ。」
(巻第五末 二五七頁)

例(27)(28)における「望ミ」はいずれも「希望」の意を表す名詞用法である。

(29)サレバ先業せんごふノ感ズル所ニ任テ、非分まかせノ福德ふく徳ヲ望ズ、心キヨクシ(テ)
天ノ與ニ随フベシ。
(巻第一〇本 四〇六頁)

(30)僅ニ身ヲタスクル衣食いじよくノ事アルヲ、不足おとひナク思テ、望もちム心ナクハ富とほリ。
(巻第一〇本 四〇八頁)

例(29)(30)における「望マズ」「望ム」は、動作行為を表す実動詞用法である。

(31)志ハウトシト云ヘドモ、所ま望む菩提びつ(ノ)爲也。
(巻第一〇末 四六一頁)

(32)後賢こうけんナヲシ明あきらめテ弘通こうつうシ給ハ所望すりむ。
(巻第一〇末 四六一頁)

例(31)(32)における「所望」は、漢文の語法で表記され、これは慣用的な、実動詞用法である。

(33)伏シテ望しのマクハ、檀那だんな始終しじゆう宗乘しゆじやうノ外護げごトシテ、令法りやうほつ久住きゆうぢゆう萬幸まんしやうナラシム。
(巻第一〇末 四五八頁)

例(33)は、書簡の用例で「望マクハ」の形で、「望むことは」でありたいの意と解され、これは助動詞用法であり、「願望」を「表出」する用法である。

(34)只天運てんうんニ任テ、希望けいぼうノ心ナク、
(巻第四 一九六頁)

(35)頭ニ雪ヲ頂キ、面ニ波ヲタ、ミツ、一生ハツクレドモ、希望けいぼうハツキザルハ、人ノ常ノ心ナリ。
(巻第八 三五九頁)

例(34)(35)における「希望」は「欲望」と同じ意味の名詞用法である。

(36)「我身ニハ別ノ所望モ候ハズ。末代ニ菩提心祈請スル人ノ候ハンニ、道心ヲ給候へ」ト、申給ケレバ
(巻第一 七七頁)

(37)「汝方所望スル佛舍利、其傍ニ臥タル物ニイへ」ト、
(巻第二 九〇頁)

例(36)における「所望」は名詞用法、例(37)における「所望スル」はサ変動詞用法である。

次に、「祈」の用法を見る。本書に「祈」は五〇例あり、そのうち動詞連用形名詞法「祈り」が二例、実動詞用法「祈ル」が一四例、熟語形式「祈申」が一〇例、「祈念」が八例、「祈請」が二二例、「祈禱」は四例見られる。

(38)「ナシニ、ソノ糞ヲ持ゾ。ヤレ、法師ガ祈ニ、仁王經ヲヨムゾ。」
(巻第五本 二一四頁)

例(38)は動詞連用形名詞法である。

(39)「神呪を持チ、名號ヲ唱テ、魔界ノ」障rierヲ拂ヒ、臨終ノ正念ヲ祈ルベシ。
(巻第二 一一五頁)

(40)「國ヲ祈リ民ヲ安クシ、災ヲ除キ福ヲ招ク事、上代ヨリ密宗ヲ勝レタリトス。」
(巻第一〇末 四五〇頁)

(41)「同ジ行業ヲ菩提ニ向テ廻向シ、叶ハザランマデモ、道心ヲバ祈リ申ベキ也。」
(巻第一 七四頁)

例(39)(40)(41)は実動詞用法である。

(42)「心愛覺ケレバ、神宮寺ニ參籠シテ、薬師如來に祈念ス。」
(巻第二 九四頁)

(43)「弟子共丁寧ニ祈請シケルニ、夢ニ、先師鬼神ノ形ニテ來レリ。」
(巻第五本 二〇二頁)

(44)「モシヤト先ツ祈禱シ、大般若ヲ信讀ニヨミタク存候。」
(巻第七 三三二頁)

例(42)(43)(44)における「祈念」「祈請」「祈禱」は熟語用法であり、いずれもサ変動詞の形で実動詞用法である。

例(42)(43)(44)における「祈念」「祈請」「祈禱」は熟語用法であり、いずれもサ変動詞の形で実動詞用法である。

次に、「乞」の用法を見る。本書に「乞」は三〇例あり、そのうち実動詞用法の「乞フ」が一七例、熟語「乞食」が一〇例、熟語「乞食」が三例見られる。

(45)「馳而馳セ歸テ、乞ユルシ、相具シテ、様々ニイタハリ、命タスカリテ、遙ニ年タクルマデ、本國ニ有ケリ。」
(巻第二 九七頁)

(46)「佛ノ弟子ハ人ニ物ヲ乞フ物也。コワレジ」トテ、ニグルナルベシ。
(巻第八 三六四頁)

例(45)は他本により「許しを乞う」の意と解し、抽象的な動作を求める意を表す。例(46)は「物を乞う」の意と解され、具体的な物を求める

意を表す。いずれも実動詞用法である。

(47) 大方ハ三衣一鉢ヲ以テ、カシヤクハツ 乞食頭陀ヲ行ズルコソ、佛弟子ノ本ニテ侍レ。
(巻第一〇末 四五三頁)

(48) 三寶ノ福田、父母師長ノ恩田、貧病乞匄ノ悲田ニモ施セズシテ、
(巻第七 三〇八頁)

(49) 大内裏ノツイガキノ外ニ、モロ／＼ノ非人・乞丐・病者ノ被_レ出タルニ、加持シテタビケレバ、病毛癩ニケリ。
(巻第一〇本 四二四頁)

例(47)における「乞食」は仏教修行の一種であり、例(48)(49)における「乞匄」は貧しい物乞いの人を表す。いずれも熟語用法である。

次に、「請」の用法を見る。本書に「請」は五三例見られるが、多くは希望表現と関係ない用法であり、希望表現と認められるのは前出の熟語形式の「祈請」以外に、一例の「起請」が見られる。

(50) 北野ニ七日參籠シ、起請ヲカキテ、
(巻第五末 二二六頁)

例(50)における「起請」は神仏に奉る誓約の文書であり、これは名詞用法である。

次に、「求」の用法を見る。本書に「求」は三〇例あり、そのうち実動詞用法の「求ム」が二六例、及び熟語形式の「希求」が二例、「所求」が一例、「欣求」が一例見られる。

(51) サレバ法ヲ説テ布施ヲ求メ、行ヲタテ、供米ヲ取ル。
(巻第八 三二六頁)

(52) 上代ノ僧ノ官途ハ上ヨリ賞シ給フ。名聞ニアラズ。近代ハ望テ名ヲ求ム。貪テ利ヲ思フ。
(巻第一〇本 四二二頁)

例(51)(52)における「布施を要求して」、「名聞を求める。」はいずれも実動詞用法である。

(53) 希求ノ志深クシテ、少キノ淨業アラバ、生ジツベシ。
(巻第二 一一八頁)

(54) 「諸ノ所求ヲ祈シヨリハ、シカシ、地藏ノ所ニシテ、一食ノ間ダ念誦シ、禮拜シテ、所願ヲ求メンニハ。」
(巻第二 一〇三頁)

(55) 「餘ヲバ、只仰テ信ジテ、厭離穢土ノ思ヒマコトシク、欣求淨土ノ志深クシテ、行住坐臥ニ念佛シテ、念々ニステザル人ノミゾ、本願ニ可_レ叶_レトミヘタル。」
(巻第六 二七五頁)

例(53)における「希求」は「極楽往生を願う」意、例(54)における「所求」は「乞い願うこと」の意、例(55)における「欣求」は「浄土に生まれることを願う」意と解され、いずれも熟語形式の用法である。

次に、「誂」の用法を見る。本書に「誂」は一例あり、連用形名詞法である。

(56) 「此苦ヲ救ベキヨシ、御アツラエアリ。」
(巻第八 三六一頁)

例(56)における「アツラエ」は「この苦から救うようにご依頼があった。」の意と解され、連用形名詞法の用法である。

4、「ホシ」「マホシ」「タシ」「バヤ」「モガナ」「ナン」の用法

まず、「ホシ」の用法を見る。本書に形容詞「ホシ」は二〇例あり、そのうち派生語の「ホシサ」が三例、「ホシガル」が三例見られる。

(57) 日來ホシト思ケレバ、二三坏ヨク、食テ、坊主ガ祕藏ノ水瓶ヲ、アマダリノ石ニ打アテ、打破テヲキツ。
(卷第八 三四六頁)

例(57)は「ホシ」の終止形の形であり、「日頃から飴を食べたいと思っていたので、」の意と解され、三人称の「願望」を「説明」する用法である。

(58) 或俗士ノ下人、主ノ親キ人ノ下人ノ、乗ヨキ馬ヲ持チタルヲ、ホシク思ヒケル儘ニ、
(卷第七 三〇三頁)

(59) 此禪師、武藏野ノ野中ニテ、水ノホシカリケレバ、小家ノミヘケルニ立ヨリテ、
(卷第五 二二九頁)

例(58)は連用形「ホシク」の形であり、「手に入れたいと思っていたが、」の意と解され、(59)は連用形「ホシカリ」の形であり、「水がほしかったので、」の意と解され、いずれも三人称の「願望」を「説明」する用法である。

(60) ヨソヨリホシキ物トリチラシケリ。
(卷第一〇末 四四八頁)

例(60)は連体形「ホシキ」の形であり、「他人がほしいものを分けてい

た。」の意と解され、一人称の「願望」を「説明」する用法である。

(61) 拙ク不當ニシテ、物ホシサニコソ候ヘ「トイヘバ、
(卷第一〇本 四一五頁)

例(61)は「ホシ」に接尾語「サ」を付けた「ホシサ」の形であり、「理に合わないが、物がほしくて」の意と解され、「願望」を「説明」する名詞的用法である。

(62) 能才覺モナク、戒行・智恵モナクシテ、布施ヲホシガリ、供糝ヲノゾム。
(卷第一〇末 四三八頁)

例(62)は「ホシ」の派生語「ホシガル」の形であり、「他人の施しをほしがり、」の意と解され、内心の「願望」が外に現れている動作行為を表す動詞的用法である。

次に、「マホシ」の用法を見る。本書に「マホシ」は二例見られ、いずれも「ある」の未然形に接続する。

(63) 君モ臣モ賢ナル世ヲコソ、アラマホシク侍レト云云。
(卷第三 一四七頁)

(64) 佛ニツカヘバ、現世安穩、後生善處コソ、アラマホシケレドモ、人意、多ハ今生ノ樂ニ誇ヌレバ、後世菩提ノ勤ヲ忘ル。
(卷第六 二八三頁)

例(63) (64)は地の文における用例であり、「賢なる世でありたいものだ。」「現世での安穩と後世での往生こそを望むが、」の意と解され、

いずれも「希求」を「説明」する用法である。

次に、「タシ」の用法を見る。本書に「タシ」は一五例あり、そのうちの六例が漢字表記である。

(65)「大般若ヲ信讀ニヨミタク存候。」
(卷第七 三三二頁)

(66)「馴ナシキ申事ニテ候ヘドモ、承り度候」ト云ケル。
(卷第八 三五〇頁)

例(65) (66)は「タシ」の連用形の形であり、「大般若經を正式に読みたいと思う。」「知りたく存じます。」の意と解され、一人称の「願望」を「表出」する用法である。

(67)「往生不定ナレバ、水ニ入テ後、ナヲホモ浮出度キ事アラバ引ベシ、サテハ引出シ給へ」トテ
(卷第四 一九三頁)

例(67)は「タシ」の連体形の形であり、「浮き上がりたくなったら、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(68)「サリナガラ、ヒトリモ心安テコソアリタケレバ、只上リ給へ」ト云ケレドモ、
(卷第九 三八五頁)

例(68)は「タシ」の已然形の形であり、「それぞれに安心していただけば、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

次に、「バヤ」の用法を見る。本書に「バヤ」は一八例見られ、和歌、会話文、心話文に用いられる。

沙石集における希望表現について

(69) 矢ウチハゲ ヒヤウト射バヤト思ヘドモ サラバ世ラソムカデコソ
アラメ 人目ハツカシ思カヘシツ
(卷第五末 二三七頁)

(70) 布施ノカサモトラバヤト思テ、「酒ハノミ候ワズ」ト云。
(卷第七 三三三頁)

例(69)は歌謡の中における用例、(70)は心話文における用例であり、「矢を射たいと思うけれども、」「多くの布施をとりたいと思つて、」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(71)「同クハ世間ニナキヤウナル御名ヲ、付ケマイラセ候ワバヤト思候」ト云ヘバ、
(卷第八 三四七頁)

(72)「近比ヨリ念佛ヲモ申シ、善根ヲモ營マバヤト存候ゾ」ト云。
(卷第八 三五八頁)

例(71) (72)は会話文における用例、「バヤと思う」の形であり、「名前をつけてさしあげたいと思います。」「善根を営みたいと思う。」「の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(73)「サラバソレヲ見候バヤ」ト云ニ、
(卷第九 三八六頁)

(74)「アマリニ貴ク覺テ、「法相ノ大事少々承ハラバヤ」トイヘバ、」
(卷第一〇末 四四二頁)

例(73) (74)は会話文における用例、言い切りの形であり、「その馬を見たい。」「法相宗の要諦を少しなりとも承りたい。」「の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

次に、「モガナ」の用法を見る。本書に終助詞「モガナ」は一例見られる。

(75) 古里へユク人モガナツゲヤラム シラヌ山路ニ一人マヨウト
(卷第五末 二四〇頁)

例(75)は和歌における用例であり、「古里に行く人がいてほしい。」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

次に、「ナン」の用法を見る。本書に「ナン」は一例見られる。

(76) 「カク心苦クテスマンヨリハ、都ニテハトテモ角スギナン」トテ、
京ヘゾ誘ヒケル。
(卷第九 三八五頁)

例(76)は、「都にいればなんとかして過ごせてほしい」の意と解され、「希求」を「表出」する用法である。

四、おわりに

以上、沙石集における希望表現の構成と用法を考察してきた。内容と全体の分量の豊富さと関連して、用例も豊富に現れる。その希望表現の構成形式の種類は今まで考察してきた仏教説話と類似する傾向にあるが、漢字片仮名交じり文に希望表現としてよく見られる「ネガハクハ」が見られない。また、希望の助動詞「マホシ」より「タシ」が多用されている。この時代の傾向としてとらえられることである。

各構成形式の用方の特徴については、「欲」は人間一般の「ヨク」と「五欲」「貪欲」などの仏教用語の両方を表すが、それに対して、音読される「願」は仏教用語を表し、人間一般の「ねがい」は訓読の「願ヒ」で

表す傾向が見られる。また、この時代に多数用いられる慣用形式の「願ハクハ」は見られず、同じ語構成の「望ハクハ」が一例見られる。

全体的には、慣用形式「ソントオモフ」「望マクハ」及び和語の形容詞、助動詞、終助詞は内心の希望を表し、希望表現の中核であることが今までの考察と一致する。

【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願い望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接的や過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかつた」「二人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大事典』第三卷 一九八四年四月第一刷発行 岩波書店
(4) (5) (6) (7) 注(2)参照。

(しばたしゅうじ) 香川大学名誉教授
(れんちゅうゆう) 広島市立大学客員研究員

(二〇一八年五月三一日受理)